

聞名仏教

第108号
(発行日)

2019年9月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8月は休み
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月18日午後6時30分始

私はどこにいるのか

先日、私の寺で一周忌のご法事をなさったお方が、法要後にすがすがしい面持ちで、「私は仏教徒なんです」と話された。ご自分が仏教徒であったことをあらためて確認された喜びを語られたのです。その方のお家は代々浄土真宗でしたが、しかし自分自身がまだ浄土真宗の門徒であり広くは仏教徒であるという自覚がなかったのです。

ところが縁が熟したとおうか、高齢になって身近な人の死が増えるに従って仏事にあうことが多くなり、自分が「仏教徒であった」と目覚め、仏教を自らの人生観・世界観としてあらためて選び取られたのでした。

こういうことは何でもないうのですが、家が仏教であり真宗門徒であっても、無自覚なまま慣習として仏教儀礼に携わっているだけであって、自分自身はどっ

ぷりと世俗の価値観や人生観に疑いもなく随順している場合が多いのです。

世俗の人生観とは、人生観と言うほどしっかりしたものではなく、お金と健康が一番大事で、その上でできるだけ楽しく生きるという程度の考えでありましょう。世間の常識をベースにして、世間の価値観にしたがって判断し、自分の都合の良いことを選び、都合の悪いことを避けていくという生き方です。

「仏教徒」という言葉はもともと仏の教に従ってこの世を生きていくともがら、という意味ですから、仏教の世界観や価値観を自らの判断の基準として生きようとする人たちの事であるはずですが。

仏教では真理に迷っている人を凡夫といい、悟った方を仏といいます。

迷っているということとは、本当の幸せとは何かが分からず、その幸せに至る道が分からず、生きている意味が分からず、自分とは何ものかが分からない。

更に言えば自分がどこにいるかという立ち位置が分からずに生きている人のこととです。しかも悲しいことに自分が迷っていることも分からない。そういう姿を迷いの凡夫といいます。

「迷える人は道を問わず」と言いますが、初めての土地で自分の知人の家を訪ねていく場合、歩いて行く方向が全く間違っているのに、そのことに気づかずどんどん歩いている姿は滑稽でもあるし悲しいことでもあります。

ところが「何か変だ。道を間違えたのではなからうか」と感じ始めてその土地

のことをよく知っている人に尋ね、その人から正しい方向と相手の居場所などを教えていただいて、方向を転換して、やっと目的地に達します。

ところが「自分の歩んでいる道はおかしい、これは迷っているのではないかと疑問を持つことがなければいつまでたっても人に尋ねませんから目的地には着かないままです。

人生の幸せとは何か。その幸せに至る道は何か。なぜ生きねばならないのか。そういうことは迷っている人が頭をひねくり返してもなかなか分かりません。それは本当に分かったお方に聞くほかはありません。本当に分かったお方、それを覚者と申します。歴史上では釈尊の様なお方です。釈尊の説法を聞かせていただ

《 秋季彼岸会 》

九月二十二日 (日)

午後二時始まり

いて、教えに従って歩むのであります。釈尊の説法は經典として伝持され、浄土真宗ではそれは「仏説無量寿経」に説かれています。仏教徒である真宗門徒は仏説無量寿経の教説を聞くことによつて、自らの迷いを離れて真実に赴く道に出ることができなのです。ですから聞法は大事なのです。

ところで「迷う」ということで身にしみて感じることは「自分が今どこにいるか」という問題です。

これについて以前中国に、ツアーでなく自由な旅をした時に、こんなことがありました。

関空を出発し上海の浦東国際空港に到着。時速三〇〇キロ以上で走るリニアカーに乗って、一〇分余りで上海の街に入る。地下鉄に乗り、有名な〈外灘〉近くの駅に降りて、地上に上がつて街をあちこち歩き回る。ところが初めての所だから迷つてしまい、元の地下鉄の駅に帰ろうとするのですが見当がつかず困つて

しまいました。

日本語表記の上海の地図を広げるのですが、ここで一番問題になるのがうろろしている私自身が「私は今この地図上のどこにいるのか」という問題です。このことを尋ねようと思つて近くにいる中国人に身振り手振り「この地図上のどこに私は今いるのですか」と尋ねるのですが、なかなか質問の意図が相手に通じないのです。というのは相手の中国人にとつて、目の前のこの人が「自分がどこにいるか」を尋ねているとは案外察してもらえないのです。現地の人にとつては余りにも当たり前のことだからです。何とか質問の意味が分かつてもらい「あなたはここにいますのですよ」と地図上の一点を教えられて、やっと自分の立ち位置が分かり、元に帰ることができたのです。

見知らぬ土地を気ままにぶらぶら旅する場合、「私はどこにいるのか」ということを知っておくということとは非常に大事であつて、それが分からないと行

きも帰りもならない羽目に落ちいます。

このことは日々を生きる人生全体についてもいえることです。人生も毎日が初めて経験する旅のようなものです。未来に何が起こるか全く不透明な旅を一日一日と送っています。それゆえ「私は何のために生きているのか」「私は結局いつたいどこへ行くのだろうか」というとまどいや不安がつきまといまふ。

その場合、一番大事なことは「私は今どこにいるのか」という現在の立つている場を知ることです。

これの答えが「自宅にいる」とか「西宮市の甲子園球場の近くにいる」とかいような地理的な場所を知つていても全然答えにはなりません。

それは、全人生が今この一点におさまっている「今この私の立つている場」はどういう場所であるのか。それが明らかになることこそ救いであり生きる意味と方向が明らかになる極めて大事な一点といつて

いいでしょう。

その答を端的に言えば、「今私はアミダ仏のあたたかいのちにおさめ取られている、そういう場所に念々離れがたく置かれているのだ」ということです。この有難い場所はいつでもどこでも、たとえ死の淵に於いても私に離れないのです。

しかも、そのことは私が自分勝手にいろいろ考えた探したりする前に、有難いことにすでに私に無償で念々与えられているのです。

それを私に知らせて下さるみ言葉が南無阿弥陀仏と称え聞くことは、アミダ仏が「我汝を抱いている、汝を離さない、汝を浄土に連れて行く」との仰せを聞くことです。もう一つ言えばそれは「引き受ける」「助ける」の仰せであり、この仰せによつて私は今ここ、アミダ仏のいのちに抱き取られていることを知らされるのです。そして今この私を生か

して下さっているアミダ仏のいのちが、死して帰らせていただく浄土でもありません。

この立ち位置を知らないと、たとえアミダ仏のいのちの中にいても、アミダ仏のお徳は活性化してきませんから、アミダ仏はその人にとつて無きも同然です。闇の中にひとり漂っているようなものです。

それゆえお念仏を称え聞いて、アミダ仏の喚び声を聞くことが大変大事なことになるのです。(了)

〈遠方法話予定〉

○九月十四日。福井別院・午前。法話・座談。

○九月十七日。名古屋市。高畑会館。午前。法話・座談。

○九月二十六日。札幌市。昭念寺(真宗興正派)。午前・午後・法話

○十月五日。福井別院。午前。法話・座談。

○十一月九日。福井別院。午前。法話・座談。

○十一月十三日。名古屋市。高畑会館。午前。法話・座談。

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

定散自力の称名は

(和讃問答)

定散自力じょうさんの称名は

果遂じょうずいのちかいに帰してこそ

おしえざれども自然に真如の門に転入する
(浄土和讃)

現代語意識(念仏往生だから念仏一つで助かると聞いても、アミダ仏の丸助けのお心がなおいただけず、まだ称えて助かろうとする計らいが止まなような者も、「念仏申す者」どこどこまでも真実の救いにいたらしめずにはおかない」というアミダ仏のやるせない大悲の願心がお念仏にはこもっているから、称えつつ本願を聞いていくと、誰が教えるということがなくて、お念仏の大悲心が遂に行者に届いて第十八願のお助けに自然に移り入らしていただけるのである)

* * *

N 「意識で意味は大体分かりますが、定散自力の称名というのはどういう意味で

しょうか」

D 「定善自力の称名と散善自力の称名のことを言います」

N 「定善自力の称名とは」

D 「心を静めて如来浄土を念じつつ念仏を称えることです」

N 「散善自力の称名とは」

D 「心は乱れ散りながらも念仏を称えることです。ですから定散自力じょうさんの称名とは、心は静まっても散つていても、念仏を称えて浄土に生まれようとすることです」

N 「いわゆる自力の念仏のことですね」

D 「ええそうです。念仏を称えることによって助かろうとする、それを自力の念仏といえます。念仏を称え、それでもって自分を浄土に生まれる得る者となつて(定散心)助かろうとするのです」

N 「定散心とは自分を助か

るような者に仕上げているとすると、そういう心のことなのですね」

D 「ええ、この場合はお念仏を称えて、称えた功德でもってアミダ仏に助けていただくこととする、そんな心を定散心といえます」

N 「助かる身になつて助かろうと計らう心ですね」

D 「ええそうですね」

N 「では(果遂のちかいに帰してこそ)とはどういうお心ですか」

D 「果遂の誓いとは二十願のことですが、二十願における果遂の誓いの意味は十八願からうかがうことが大事です」

N 「十八願は念仏往生の願ですね」

D 「ええ、第十八願は、法蔵菩薩が(乃至十念 若不生者 不取正覚)という念仏往生の誓いを一切衆生に信じさせて助けたいと願ですが、(乃至十念 若不生者 不取正覚)というのはいつも申しますように(たとえ十声なりとも我が名を称えるばかりで浄土に生まれさせる)という広大な誓いです。このお心は、アミダ仏は私たちに何ものをも要求されない、要するに私たちの善悪・賢愚・男女・老少などの一切の属性に関わりなく、私たちのありのままです。それが(我が名を称えるばかりでタスケル)の大悲の思し召しが第十八願です」

N 「この十八願がありながら、さらに二十願を建てられたのですね。それはどうしてですか」

D 「それは念仏往生の願を聞いても、この願にこもっているアミダ仏の絶対の大悲の心がいただけず、疑つてしまう。そういう衆生が必ず出てくることをアミダ仏はすでに知り抜いて下さつて、そういう本願疑惑の衆生を見捨てず、その者に寄り添って救いへの手立てをさし寄せて下さる、それが二十願なのです」

N 「十八願を信じれなくて、十八願のお助けに会えない人、そういう人に対して、なお寄り添って救いの道を示して下さる願が二十願なのです」

D 「ええそうです」

N 「では二十願はどういう願ですか」

D 「(本願が信じられないといって嘆くではない、本願が信じられぬまま念仏してこい、そういう者を必ずいつかは十八願の救いに入らしめるから)とのお心です」

N 「それが

(十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂じょうずいせずんば、正覚を取らじ)

のお心なのです」

D 「ええ。助かりたいと思つて(念を我が国に係けて)、念仏一行を称えていけ(徳本を植え、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わん)、遂にはかならずお助けにあわせずにはおかない(果遂じょうずいせずんば)、とのお心です」

N 「本願疑惑のまま念仏一行に励むのです。そういう者を遂には十八願に入らしめずにはおかない、とままでアミダ仏は仰せられるの

ですね。ではなぜお念仏の一行で十八願への転入が実現されるのでしょうか」

D 「それはアミダ仏のお手立てですから、不思議としか言い得ません。有難い不思議なお手立てですが、どうして十八願に導かれるかをあえて少し考えてみたいと思います」

N 「どうしてなのでしょう」

D 「十八願を聞いても信じられないので、退転して道を見失ってしまうというところが当然ありますが、そんな場合、信じられなくても信じられないままに、二十願に順ってお念仏一行を申し続け、お念仏を申しつつ十八願の「我が名を称えるばかりでタスケル」という思し召しを聞き続けていく。称える念仏の一声一声は「助からぬ身であるからこそ、唯称えるばかりでまるまる引き受ける」との十八願の丸助けのお心が、お念仏を称え聞いていく中で知られてきます。我が身が「仏智の本願を疑ってやまない、アミダに反逆している助からぬ身」であること

をいよいよ知らされ、とうとうそんな者に「称えるばかりでヒキウケル」という念仏往生の大悲無窮の願心がいつのまにかその人の心に浸透し、「ああこんな私のための南無阿弥陀仏でございましてか」と知らされるのではないのでしょうか」

N 「お念仏を称えつつ本願を聞く、その繰り返しの中から、本願の大悲心がお念仏を通して、私たちの心に自然に届いて、自ずから十八願に帰入せしめて下さるのですね。では「果遂の願に帰してこそ」とは」

D 「十八願を聞いて信じられなくても念仏一行を称えていけとのお勧めに従って念仏一行に生き、本願の思し召しを聴聞する、それが果遂の誓いに帰していくこととでありましょう」

N 「そこに「おしえざれども自然に 真如の門に転入する」ということが起こるのでですね。」

D 「ええそういったお祈りです」

N 「真如の門」とは」

D 「十八願のことで真如の悟りに入る門いわば真実浄

土に入る門のことです。その門に転入するのです」

N 「へおしえざれども」とは」

D 「念仏一行を称えつつ本願の思し召しを聞きつけていく。そこに「お念仏以外は妄念妄想の我が心」と知らされ、いつのまにか本願の大悲心が自然にその人の心に浸透して信心となつて発起せしめられるのであって、それは人から教えられなくても自然にそうなつていくとお心でありましょう」

N 「聞法はするけどお念仏を称えない人はどうなのでしょう」

D 「分かりません。ただ果遂のちかいかからないといえますので、流転が長く続く可能性がありましよう」

(了)



「松並松五郎念佛語録」より

○ 仏は、名なり、声なり、御体なり、御血潮なり。南無阿弥陀仏は、大悲招喚しょうかんの呼声であります。南無阿弥陀仏の中に今、現にい抱かれて生かされています。私に成りきつて下されました。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 この活仏、声の仏ましましてこそ、かかる身が護られい抱かれて、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 いかされていきます。

(松並松五郎)

* *

(アミダ仏のお働きがいかに普遍的で広大であつても、小さく愚かな私たちには分からない。世間で神といわれ仏とよく言われるが、銘々が勝手にイメージしているだけでまことにおぼつかない。つかみようがないから、やがて神も仏もあるものかと自分の方から断念してしまう。しかるにアミダ仏は「自身を限定し、形を表して愚かで小さな私に現れて下さり喚びか

けて下さる。そのお姿が南無阿弥陀仏のお念仏の声である。大悲招喚の声である。この声でまことの仏にあわせていただくのである。

よく「仏様に生かされている」という。しかし、「生かされている」というのは二種あつて、一つはまず私があつて、その私があつて私によつて外からサポートされ、護られているというように受け止め。それは私が主で、アミダ仏は従である。松並さんの「いかされていきます」というのはアミダ仏に抱き取られてアミダ仏が主体となつて下さっているという受け止めである。それはどこから知れるかと言え、声の仏となつて存在の根元から喚びかけて下さることにより、それによつて知らされるからである。ここでアミダ仏は血潮なりと仰せられる。大悲の血潮である。このアミダ仏と私の血が通い合うという。この実感がまことに尊い。」

(了)